

地域とつながる 短期大学教育を目ざして



学長 今までも、教員、あるいは学生の皆さんと懇談をしながら、六和会会報を通して短大の現況を知っていただく機会を何回か設けてきました。仁愛短大は、現在県内唯一の短期大学ということになり、地域で本学の存在感をどう示していくかというところが大きな課題になっています。一昔前は、大学の地域貢献といえば、公開講座や図書館開放など、その資源を提供し

て地域にサービスするということが多かったように思います。現在は、地域連携というところで、地域と協働して活動していくという動きが中心になっています。授業も従来の教室型、教えこみ型から「アクティブラーニング」や「PBL」(問題解決型学習)などの新しい教育手法が広がり、フィールドに出て課題発見・課題解決能力を育成することが求められています。

そこで今回は、地域社会でさまざまな活躍されるとともに学びの場を確保しながら学生指導に当たっておられる先生方にお集まりいただき、その狙いや様子をお伺いし、現在の短期大学教育の様子を同窓生の皆さんにお伝えできればと思います。まずは、自己紹介ということで、各先生の所属と専門分野をお話してください。

木下 幼児教育学科の木下です。音楽教育に携わっております。地域活動実践センターに所属させていただいたことで、地域とのつながりや地域に出て何が出来るかということを考えるきっかけになりました。短大では、「子どもと表現(音楽)」、「音楽(ピアノ基礎演習)」などの科目を担当しています。

牧野 生活科学学科食物栄養専攻の牧野です。仁愛短大に勤務し、かれこれ30年が経ちました。専門は、公衆栄養の分野です。公衆栄養ということで地域社会を含む集団レベルでの疾病予防と健康の保持増進に必要な理論と方法について学生に伝えています。他には、「給食管理実習」、「栄養指導論」、「栄養指導実習」などの授業を担当しています。

澤崎 生活科学学科生活情報専攻の澤崎です。縁あって、5年前に仁愛短大に寄せいただきました。経営学が専門で、アメリカでMBAを取得しました。短大では、「企業研究」や「経営学」、「コミュニケーション演習」などの授業を担当しています。地域連携といえば、商工会議所等の専門相談員をしていることもあり、企業との連携を授業等に取り入れていきます。

西畑 生活科学学科生活デザイン専攻の西畑です。ビジュアルコミュニケーションという分野で、地域や企業に情報を伝えるという仕事を長年やってきました。この短大では、「生活デザイン論」、「グラフィックデザイン」などの授業を担当しています。同専攻の内山先生が、コミュニティデザインという地域の人と人をつな

げるという新しい分野で活動をされている、私の専門分野との相乗効果で地域の方から学生に何かをして欲しいという依頼が多く来るようになりました。基本的に公共からの依頼は断らないという思いでやっているのですが、それが広まっています。現在はその依頼を通して学生と一緒に自分自身も学ばせてもらっています。

学長 それでは学生とともに地域で行っている活動についてお聞かせください。

西畑 地域の方から学生に関わって欲しいという依頼が多く来ますが、その要因の一つには話題性もあると思います。でも、学生たちが素直に純粋な気持ちで制作したものは人に喜ばれますね。また、学生に心がけてもらっているのは、依頼者の話を真剣に聞き問題点や課題を考えるとということですね。このような過程を経て人のために作るということに目覚めるなど、良い関係が生まれています。デザインの場合は、形に残りますし、それが使われて役に立っていることが実感できるというのはまさにビジュアルコミュニケーションですね。

澤崎 生活情報専攻は、形あるものを生み出すという専攻ではないので、学生にリアルさを感じてもらうにはどうしたらいいか悩むところです。今の学生は、教科書だけでは満足しないので、目に見えるリアルさがないと真剣にならないのです。私が、学生と地域に出たり、依頼を受ける基準は、「学生がリアルな学びを体感できるかどうか」です。一例ですが、福井駅にハビリティがオープンする前後で、指定管理者の大津屋さんと協働での実践型授業を行いました。市場調査とポスター作成を行いました。自分たちの身近な場所がリアルに結果が見える実践を行うことができました。これは貴重な体験でもあり大きな学びだと思います。一方で、地域に出て行くことは、地域の方々にご迷惑をかけて、学ぶ

フィールドを提供していただいているという思いがいちもありません。だからこそ、多少なりとも地域のお役に立つことができない環境を創り出したいと考えています。

牧野 食物栄養専攻では、「野菜から食べる(ベジ・ファースト)」を合い言葉に、食を通じた健康づくりの推進ということで、平成28年度に福井市より「ベジ・ガールズ」として8名が任命されました。最近も募集しても学生がなかなか集まらないのが悩みです。また、何のために地域に出てその活動をするのかということを理解させるのが難しいですね。やる気のある学生はいるのですが、短期大学ということもあり、授業が詰まっています。時間が取れないということが一番のネックです。地域からの依頼もあるのですが、学生の時間が取れないため、調整がつかずお断りすることが多いのも残念です。また、名物のパウンドケーキですが、今年も県総合グリーンセンターで開催された「みどり」と花の県民運動大会でブースを提供していただけて販売しました。他には、食育フェスティバル、森田文化祭に出す予定です。そのパウンドケーキを作っている栄養研究サークルですが、例年は食物栄養専攻の学生が多いのですが、今年は食物栄養専攻の学生が1名で、部長と会計は生活情報専攻の学生です。その生活情報専攻の学生が積極的に行動してくれ、かつマネジメントがうまくて本当に感心しています。それぞれの学科専攻で特徴があり、食物栄養専攻の学生も生活情報専攻の学生から刺激を受ける部分がたくさんあると思うので、今後も他学科他専攻がサークルに入ってくれることを浸透させたいと思っています。

木下 幼児教育学科ですが、昨年は、A OSSAやハーモニーホールふくい、ハーピア春江、保育園等から、音楽に関する出し物をしていただけませんかとの依頼があり、何が学生にできるかと考えな

がらも、行動あるのみという思いで、やります」とお受けしました。その話を学生にしたところ、「行きたい、行きたい」という学生たちだったので、それもまたラッキーでした。ハーモニーホールふくいでは、すぐきなおねえさんののしい童謡とわらべうたを手遊びとともに、幼稚園教育学科の学生60名と実施しました。先日、そのイベントに参加した卒業生から、今年もそのイベントがあったら、勤務している保育園の園児を連れて見に行きたいと話をしていただのですが」との連絡が入りました。その話を聞き、卒業して社会に出ても短大での活動を思い出してくれて、短大とつながっていてくれるということを実感しました。また、彼女たちにとって、思い出に残る活動だったのだと思うと嬉しく感じました。

澤崎 外部とのつながりと言う点では、幼児教育学科や食物栄養専攻は実習があるから羨ましいです。

学長 生活情報専攻や生活デザイン専攻は外との関わりをこちら側から探していかなければいけませんからね。それでは、地域活動を通して得られる学びへの期待や、改善・改良したい点などありましたらお話ください。

西畑 地域活動でいうと、内山先生と森田地区が連携活動をしているということもあり、毎年、卒業研究等で森田に関して取り組む学生がいるのですが、短期大学は2年間ということもあるため継続して研究していくのが難しいといった点はあります。

学長 短期大学教育の宿命ですね。

西畑 良い面を言うとも、短期集中といいますか、2年間で劇的に学生が変化しますね。2年生になると就職活動もしないといけませんし、卒業研究も仕上げないといけませんから、4年制大学の学生と比較すると精一杯頑張っていますね。

澤崎 学んでいる密度が濃いなと感じま

すね。また、女子教育という観点からだと、私は、他大学の非常勤もしています。そこで感じたことは、男子学生がいるとこれは男子の仕事、これは女子の仕事など決めつけて行動している部分が多少なりともあります。でも、仁短は女子しかないないので、リーダーも女子、重たい物を持つのも女子、まとめるのも女子と誰かに頼るという考えはなく自ら進んで行動できる場所は、自然とリーダーシップが育ついい環境だと思っています。女子教育の良い面だと感じています。

西畑 ふくい夢アートなどのイベントで片づけをした時も、うちの学生が力仕事も厭わずきびきび動き、きれいになった会場を見た周りの方から「女の子なのにすごいですね、よく頑張るね」と言われたことを思い出しました。

澤崎 地域活動に関して課題を感じているのが、学ぶフィールドが毎年変わるの連続性という部分です。今年も授業で連携する予定だったイベントが、相手側の予算の関係で中止になりそうなので。リアルなフィールドを使うことは、リアルな問題点に直面する可能性もあるわけ、継続していく困難さを感じています。

学長 生きた学習素材であると、そのような問題も起こってくるのですね。

木下 私も、継続していくことの難しさを感じています。昨年はあつたイベントが今年はないので、という訳で今年、学内のF館で親のためのコンサートを開催することにしました。また、手伝ってくれる学生を募って、楽しく活動していただろうと思っています。少しずつですが、発表する場を求めて継続していただろうと考えています。

澤崎 楽しく継続していくというのは大事ですね。

学長 継続性という課題が出ましたが、地域に出向き学ぶという学習方法は今後重要になってくると思います。そのよう

な中で、地域に出て活躍している同窓生に対してひと言メッセージをお願いします。

西畑 オープンキャンパスの時に「せんばいなう」と銘打って卒業生に来てもらい、高校生へ向けて仁短で学んで良かったことなどを話してもらおう企画を実施しました。蓋を開けてみると高校生よりもオープンキャンパスを手伝っている在学生が真剣に聞いていました。その姿を高校生がうんうんと見ているのがすごくよかったです。結びつけてくれる同窓生と社会とはとても大事ですね。仁短の同窓生は約2万人いるということ、社会に出てとても心強い存在だと思います。

学長 食物栄養や幼児教育の分野は卒業生が大勢いる分野ですから、実習などで学生がお世話になる機会が多い分、先輩の指導にはより一層、熱が入るかもしれませんね。

木下 園長クラスの先生も同窓生の方が多い、その時代はみんなピアノが弾けたのですが、今はピアノ初心者の方が多いので、そのような学生が実習に行くこと大変そうですね。幼児教育において音楽の重要性を感じている学生はとて多いので、音楽の楽しさを園児に伝えられるような学生を育てられたらと思っています。

牧野 食物栄養専攻もほとんどの校外実習先にベテランの同窓生がいます。かつての学生時代を思い出して、学生に少し厳しい部分もありますが、今の学生の現状を理解し、柔軟に対応してくれていると感じます。いろいろな意見もいただき、後輩だからということで、温かく見守ってくれているようです。今後もお世話になります。よろしくお願いします。

澤崎 生活情報専攻の卒業生は社会に出てしまおうと、OGであることが分かります。お願いしたいのは、自信を持って仁短卒ということをPRしていただきたいと思

います。また、生活情報専攻の後輩である学生たちも頑張っていますので、いろいろな活動に気が付かれましたら応援していただき、併せて周囲の方々に発信していただけるとう非常に有難いです。

西畑 OGの方々に、学生が活躍している事柄をこちらからも伝えていかないといいですね。

学長 同窓生とつながる手段として、六和会で思ったことを自由に投稿できるようなSNSなどを利用するのも一つの方法かもしれませんね。

西畑 OGで思い出しましたが、仁愛短大の食物コースを卒業した私の同級生が、栄養士の資格を申請するため、仁愛短大に4年ぶりに来たとのことでした。なぜ、資格を申請に来たかというところ、60歳の定年を迎え、今度は地元でカフェを開きたいというのです。それを聞いて、選任を過ぎても新しい事に挑戦しようという女性の強さを感じましたし、女性の素晴らしいところだと思いました。いくつになっても前を向いて歩いていく女性を育てる仁愛短大の歴史と伝統を感じました。

学長 今後、同窓生の方々に、学生が社会に出て活動する際のロールモデルとしてさらなる活躍を期待するとともに、地域活動等で学生が外に出た際には、一層のご支援をよろしくお願いいたします。

追記 学生の皆さんの活動の様子は、短期大学の公式ホームページ (<http://lin-aia.jp/>) の「じんだんなう」をクリックしていただくと、短大の行事や授業の様子とともに見ることが出来ます。また本学の発行している地域活動をまとめた「SOCIUS」という機関誌は、県内の公共図書館にも送付してありますので、同窓生の皆様にもご覧いただければ嬉しく思います。



幼児教育学科 教授 木下 由香



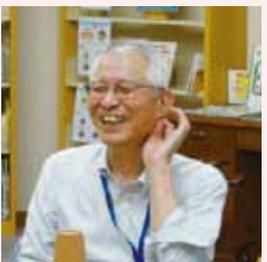
生活科学学科 食物栄養専攻 教授 牧野 みゆき



生活科学学科 生活情報専攻 准教授 澤崎 敏文



生活科学学科 生活デザイン専攻 教授 西畑 敏秀



学長 禿 正宣